

実践報告

保育内容「総合表現」を振り返って

馬 杉 知 佐 ・ 久 保 田 貴 美 子 ・ 乗 松 恵 美

1. はじめに

今年度も新型コロナウイルスの猛威は収まらず、活動制限との隣り合わせの一年であり、対面授業である保育内容「総合表現」は年間計画通りに進めていくことが困難な状況が続いた。

このような情勢の中でも感染拡大防止の対策をとりながら、主体的・対話的な表現活動を通して4×3の比治山力である「自立」「想像」「共生」「創造」を軸とし、保育士に必要な表現力を身に付けることに重点を置き活動した。

どのような状況下においても子どもの成長は止まらない。子どもの感性や表現力を豊かな感性や想像力を豊かに育てるには、保育者自信がその資質・能力を備えていることが重要である。

1年次に学んだ「音楽」「身体」「造形」などの表現方法を用いながらイメージやアイデアを具体的な形として表し、具体的な指導場面を想定した保育を構想しながら進めていった。

2. 童謡を題材とする創作オペレッタ制作

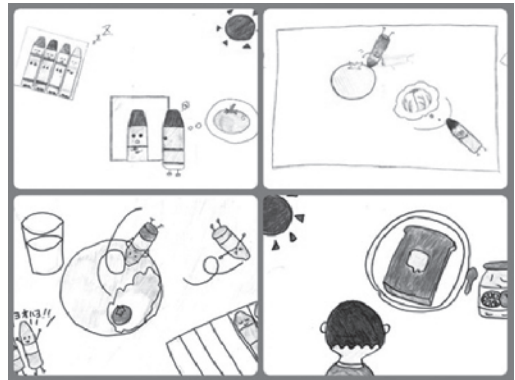
1クラスを3つのグループ(15名前後)に分け、童謡を題材とする創作オペレッタを制作。令和3年度総合表現Ⅰの最後の授業時間に多目的ホールで2クラス合同の相互発表会を行った。各グループで題材とする童謡は自由選択、ナレーションや演技の挿入はあるが原曲の歌詞や主旋律の内容を崩さない演奏を行うことを原則とした作品を制作した。制作にあたり、グループ内で担当を①台本・演出②美術③音響の3部門に分け、随時お互いの進捗状況を相談しつつ作業を進めた。

①台本・演出

童謡の歌詞を元に、まず登場人物・場面設定等の分析考察のためのブレインストーミングを行い、それを元にして場面のイラストを作成した。



ブレインストーミングの様子



シーン考案イラスト例《おはようクレヨン》

これらの作業を経て、童謡の本来の歌詞にナレーションや設定した登場人物の台詞を加えたオリジナル台本を作成した。

出来上がった台本を元に演出プランを考える

際、学生から照明の色変更やスポットライトを使いたいという希望が上がったが、将来各々が保育施設での舞台制作では使用できる機材が限られていることを想定し、室内照明のオンオフという必要最小限の照明演出の中でプラン作成を進めた。

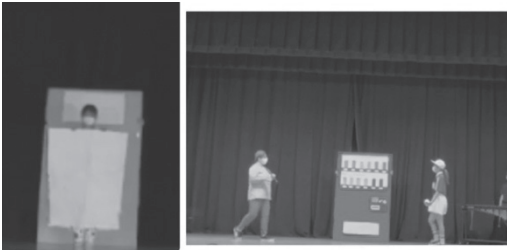
②美術

各グループでオリジナル台本を元に必要な小道具・大道具を作製した。作製物が小さすぎたり配色が薄いと視覚的印象が弱く、道具としての演出効果が落ちるため、舞台上での表現の演出意図が観客に伝わるように大きさや色合いに配慮しながら道具類の仕上げを行った。



道具作製工夫例《おはようクレヨン》

舞台上にある作品のモチーフが観客からわかりやすい大きさや色合いになるように作製されている。



道具作製工夫例《ぼくのミックスジュース》

主人公が布団で眠っている場面で、実際に舞台上に寝そべるのではなく、布団を垂直に立たせた形で作製し、主人公は立ったまま掛け布団を持つことで布団の中に入っている様子を表現した。登場人物を真上の視点から見せることで、悪夢にうなされる主人公の演技表情を客席に見

せることが出来ると共に、場面変換の中で観客の目線位置がスイッチするカメラ映像作品のような演出効果を生んでいた。

また立位の主人公がすっぽり入るように作られたこの布団は、作製物として大きなものになるが、別場面では裏返して自動販売機として使用するなど、随所に道具作製上の工夫を見ることが出来た。

③音響

題材の童謡演奏では楽器の音色の特性を活かして物語を演出する効果音を挿入した。各グループでピアノ、トーンチャイム、マリンバ、クラリネットやアコースティックギター等の楽器の出来る学生が積極的に参加している様子が見られた。また、打楽器などで効果音を作る事により、タイミングよく場面を盛り上げることができた。



音楽担当にクラリネット奏者が入ったグループ《おはようクレヨン》

本来童謡は歌とピアノ伴奏のみの楽譜の為、譜面にない楽器を使用する際はオリジナルの旋律を作って挿入、もしくは曲のコード進行に沿う音で演奏する工夫を行っていた。



舞台下でキャスト以外のメンバーが歌唱参加しているグループ《朝いちばん早いのは》

コロナ禍の中の演奏発表では全員がマスクを着用した状態での歌唱となり、全体の演奏音量、特に歌唱の音量は小さく聞こえてしまう。しかしこのグループの発表では舞台上に出演するキャストの他に、舞台転換の合間で手の空いているメンバー全員が舞台下の客席に近い場所で演奏を補助していた。これは音量不足を補うだけでなく、観客に近い視線の位置で演奏を行うことで、本来の対象者である子どもたちに出演者の息遣いや躍動感をより身近に感じやすくさせ、舞台上の物語に対象者を惹き込む効果が期待できる表現発表となっていた。

各グループの発表の様子

毎日大学に来れる状況ではない中、効果的に時間を使い、全体での練習をどのようにして進めていくかがポイントとなった。保育士という仕事においても限られた時間の中での作業が大事であり、タイムマネジメントも必要である。通しのゲネプロは行えなかったが、本番は混乱もなくスムーズに行えた。

1組1グループ

渋谷毅作曲《ぼくのミックスジュース》



1組2グループ

谷山浩子作曲《おはようクレヨン》



1組3グループ

谷山浩子作曲《おはようクレヨン》



2組1グループ

越部信義作曲《朝いちばん早いのは》



2組2グループ

谷山浩子作曲《おはようクレヨン》



2組3グループ

渋谷毅作曲《ぼくのミックスジュース》



3. 童謡を題材とする「歌の絵本」

緊急事態宣言下で全面登校禁止となった期間の授業では対面共同で行う作業が不可能となり、各自が自宅で出来る課題として、童謡を題材とする「歌の絵本」の制作を行った。

題材とする童謡は1年次音楽ベーシックⅠ、Ⅱで学んだ『こどものうた200』または『続こどものうた200』の中にある曲を中心に各自で題材曲を選び、オリジナル絵本と演奏動画の制作を課題とした。

①オリジナル絵本の制作

八つ切り半分の大きさの画用紙を用い、表紙と裏表紙を含め8ページに収まるように歌詞の割り振りと絵を考える。使用する画材は自由。まずは歌詞をしっかりと読み込み、その歌の魅力を手がかりに理解し味わいながら絵コンテを描いていく。ここで重要なことは、歌詞をすべて絵で説明あるいは再現しようとするしないこと。幼児は歌ったり、絵本を見たりすることでいろいろなことを感じ、想像の世界を楽しむのである。歌に視覚的なイメージが加わることで、より一層その歌の魅力が幼児に伝わるよう工夫することが求められる。

絵を描くのが苦手という学生も多いが、上手い下手関係なく、どうしたら子どもたちとその歌の世界を楽しむことができるか、まずは自分自身が楽しみながら制作していくことを期待した。



作品例1《朝いちばん早いのは》絵本

改ページや描くシーン数などの配分は各自で

自由に設定し、実際に子どもたちを前にする際絵本をみながら一緒に歌うことができるように、歌詞を絵本の文章として挿入している。

②「歌の絵本」演奏動画作成

制作した絵本作品を使用し、弾き歌いまたはアカペラで童謡の演奏と同時に絵本を見せる動画を作成する。



作品例2《とけいのうた》の動画の様子

時計の針を動かせる工夫のある絵本作品を、動画の中では実際に動かしているところを見せながら演奏を行っていた。右ページの躍動感のあるキャラクターの表情がより一層豊かに感じられる作品になっていた。

4. まとめ・おわりに

本年度もまた子ども達の前で創作したものを発表できる機会はなく、残念ながら授業内だけでの発表となった。しかしながら、リモート授業も多い中、貴重な対面授業を学生達は楽しみにし、積極的に生き生きと活動していたように思える。このことは授業アンケートでも反映され、満足度がとても高い結果となった。

「オペレッタ製作」では、相手の意見を尊重しながらも自分のアイデアをどう生かすか、自分の役割をいかに果たすかなども考えなければならない。オペレッタはステージ上に立っている人が目立つ傾向があるが、舞台作品は美術や小道具、それらを動かす裏方を土台として成り

立っている。目立つ、目立たないではなく、自分の得意な分野を生かしつつそれらが一つの作品に集約された発表は、教員が見ても素晴らしいものであった。またお互いの作品を見ることで、新しい観点やアイデアが生まれ各々のモチベーションを高めることができた。

「歌の絵本」では動画のクオリティーが高く、演奏方法や編集にまで工夫を凝らしてある作品も多くあった。また、オープンキャンパス時にいくつかの作品を動画で披露したが、高校生だけでなく、保護者の方にも感動してもらえた。

以下アンケートからの抜粋である。

保護者

- ・コロナ禍で大学がどのように機能しているのか、学生さん達がどうやって学んでいるのが不安であったが、こうやって学習成果を動画で発表できるのは素晴らしい事だと思った。親からしても自分の子どもの成長や作品が見れるのは嬉しいし、大学に行かせて良かったと感じれると思う。
- ・テレビなどでは学生の主体的のなさやSNS、YouTubeなど携帯の見過ぎなどがよく伝えられるが、こうやって歌の絵本を自分達で動画にできるのがすごいと思った。携帯も悪いだけでなく、使い方でも保育に活かせることができるのを知れて良かった。
- ・絵も歌も録画も全て学生さん一人ががやっているのを知ってびっくりした。
- ・大人が見ても見応えがあった。

高校3年生

- ・コロナで実際に先輩達がいなかったのが残念だったが、授業でやった作品を見る事で、様子が知れて良かった。

- ・大学に入ってから授業のイメージが持てた。
- ・子どもを育てる為には、自分自身が豊かなイメージを持たないとダメだということが分かった。
- ・先輩達の作品がかっこよかった！
- ・動画で発表するのがすごいと思った。もし、保育園が休みになっても、担任の先生がテレビの向こうから話しかけてくれたり、歌の絵本を読んでくれたら、私だったらとても嬉しいと思う。

高校2年生

- ・保育士になる為には、いろんなことができないといけないと思った。今からピアノだけでなく絵を描いたり、絵本を読んだりしようと思った。
- ・子どもが好きということだけでは、保育士になれないのだと思った。自分でこんな作品ができるのかどうか不安になったが、チャレンジしてみたい気持ちもある

オープンキャンパスも学生が直接参加できる機会がほとんどなかったが、このように作品を通して授業内容や我々の伝えたいことが外部に表現でき、2年間の成長を感じる結果となった。

学生だけでなく我々もまた戸惑いだらけの2年間であったが、授業を通して新しい表現方法を模索できたのではないかと思う。子どもは様々な人間と関わってはじめて成長していく。難しい状況が続くと思われるが、出来ないことを諦めるのではなく自分の得意なことを強みに生かし、どのような時でも子どもに寄り添える保育者になって欲しい。